



先月の台風15号に伴う千葉での災害支援活動に引き続き、今月も台風19号に伴う長野での災害支援の活動から記述する。

労協連では、長野市、上田市の現場や組合員の家庭に土砂が流れ込むなどの被害が出た。千曲川が決壊した穂保地域では、常会の役員を務めている労協ながの組合員より支援の要請を受け、労協ながのとして被災地に入るようになった。

10月20日(日)は、労協ながのを中心に、センター事業団・労協連から応援に駆け付けた総勢32名が泥の掻き出しや家財道具の搬出を行った。

最初は、呆然とするような泥の量であったが、住民が懸命に作業している姿を見て、できることをみんなでやろうと協力し作業に入った。泥掻きを進めるなかで、少しずつ床が見え始めた。また泥で埋まり壊れた家財道具などの搬出を行った。

普段清掃で使用している高圧洗浄機は、センター東京南部からもってきたバイオディーゼルの発電機から電源を取り、家をきれいにしていった。センター東京東部から乗ってきた2tトラックや、センター信州新町の軽トラックなどは、外に出された家財道具を臨時で作ったゴミ仮置き場に次々と運ぶのに役立った。労協ながのの組合員は清掃の仕事で慣れているのか、指示された被災した家庭にどんどん入り、つぎつぎときれいにしていった。被災した組合員本人の家が全然片付いて

いないことに気づき、最後は全員で組合員のお宅に入り作業し、作業を終えた。

その後も3週連続で日曜日に穂保地域での支援活動を行い、全国から集まった義捐金や物資や人材の応援を活かすことができた。全国組織や連帯の強さだけでなく、ワーカーズコープと地域が連帯することの意味を改めて実感する場面となった。また、気候の変動により、どの地域でも防災や災害支援に向けた準備が必要となるだろう。この間の災害支援の取り組みから学び、具体的な対策を検討したい。また環境をベースにした地域づくりを根本に据えて、みんなのおうち構想や地域循環型事業を推進していく必要を感じた。

全国代表者会議が10月25-26日に開催された。初日のパネルディスカッションでは、信州新町信級地域でまちおこしに取り組む寺島さんの、「なにもないけど、なんでもある！」と食堂を開き山の幸のランチを提供しながら地域の拠り所を作る取り組みに多くの組合員が励まされた。また篠路では、就労困難な利用者で現在一緒に働く仲間からの「受け入れてもらえる場所、今の自分の原点、当時の自分に大丈夫だよと言いたい」の言葉は、協同労働をしている意味を改めて自分たちに実感させてくれ、そうした運営を行っていくことで多様な仲間や協力者が

集まり、事業や経営が安定していくことを学んだ。

法案骨子の学習会も開催し、初めて見る人や難しかったという感想もあるものの、多くの組合員が協同総研の島村さんのQ&Aを通して労協法そもその必要

性と内容、そして実際に協同労働で運営することの大事さを学んだ。今後さらに、各組織、事業所で学習会を進め、自らの協同労働を深め合い、地域に発信することが法制化の実現に繋がると信じて取り組んでいきたい。

